

クリステイの楽しみ方はおよそ三種ある。

一は、長編を読むこと。これが一般的すぎて満足できないという人のためには、別の選択がある。二は、短編を読むこと。三は、クリステイ原作の映画を観ること。どちらもそれぞれ違った面白味をそなえている。

クリステイの生涯作品は、ミステリ長編六十六、短編約百五十。長編のクリステイと短編のクリステイとは、しばしば異なった貌をみせる。長編がフォーマルに際なく計算された装いだとすれば、短編はごく私的なもてなしの気さくさに溢れている。もちろん作品の断面を切り取れば、会話主体の親しみやすい文体、というクリステイ印に変化があるわけではない。しかし短編世界には作者の「秘密の顔」が無意識に滲み出していることがある。

長編タイプの大家による短編は「中には面白いものもある」という評でまとめられてしまうことが多い。エラリー・クイーンにしても、テイクス・カーにしても……。現存する短編ミステリ作家の第一人者であるエドワード・ロホックの評価（「一語の無駄もなし」）も、そこに落ち着く。なおホック推薦のクリステイ短編ベストは次のとおり。——「検察側の証人」「事故」「ナイチンゲール荘」「三匹の盲犬スミ」、そして本書所収の「死人の鏡」。

このリストは、おおむね平均的な評価と考えられるだろう。

しかしこれだけでクリステイ短編を片づけるのは惜しい気もする。ちなみに、わたしの好みでベストを選ぶば、ホワロものの「夢」（なんとも愛想のないタイトルで多くの読者の記憶に引っかかりそうもない——本文庫では『クリスマス・プディングの冒険』に収録）、探偵役の出てこない「仄暗い鏡のなかに」（ケリン・マクローの同名小説とはまた違った味わい——『黄色いアイリス』に収録）、そして本書所収の「砂にかかれた三角形」。

クリステイ短編には、大別してキャラクター探偵ものと単発ものがある。初期の短編集にはホラーに近接するものも目立つ。探偵役を私流の好みで並べてみると、クイン氏、ホワロ、パーカー・パイントニーとタペンス、ミス・マーブル、となる。それぞれの持ち味は見事に書き分けられているが、とりわけ『謎のクイン氏』のクリステイらしからぬ深刻味に魅かれる。この短編集については、作者自身、「読者を選ぶ」と書いている。「探偵いかにあるべきか」というクイーン的命題に、最もクリステイが踏みこんだ作品の一つだろう。

や、いけない、いけない。ホワロものの解説で他のキャラクターを褒めてはしけなかった。

クリステイのホワロにたいする感情は、ことのほか冷たいものだったと思う。自らの創造した主人公には愛着があつて当たり前だが、クリステイの場合はこれが当たり前ではない。このドライさは、むしろ作家の偉大さだろう。ミス・マーブルだと作者との距離がなますぎる（どうしてもそつ読めてしまう）。作者はホワロというキャラクターをつくつて、ただの謎解き探偵たる職能のみを与えた。彼の人気を語る特徴の一つひとつは、ごく表面的な性格だ。灰色の脳細胞を中におさめた卵形の頭、ポマートでかちかちに固めたロビゲ、王手ミとかエロア、などと連発するところ、ス語の間投詞、自惚れ屋のくせにふつこの英語を間違えて恥をかく癖（ある作品では、リット・ベリグを「鮭の燻製」と言い間違えたりしている）など。読者には親しまれたが、作者は冷徹に距離を置いていたように思える。

だから『カーテン——ホワロ最後の事件』における、探偵の衝撃的な退場は、作者としてはごく自

然な選択だったろう。ポワロなればこそ、というが、作者はポワロを「その程度の人物」としてしか扱う気はなかった。注、この数行は『カーテン』未読の方には意味不明。申しわけありません。

探偵の人間像は、初期の『ポワロ登場』の二編では、「かわいそうに！ 第二次大戦のせいで頭がいかれてしまってる！」とさえ描かれている。これは親しい友人による感想とはいえ、かなり辛辣なものだ。クリステイヤー世界の人物としても、ずいぶんと過激な性格だ。灰色の脳細胞からはみ出して余りある。もちろんポワロが示す極端さは、彼の活動の全般をおおつものではない。注目すべきは、作者が主人公への愛着ゆえにこうした「頭がいけた」側面を強調したのではない、という点だ。

パーカー・ペインは依頼人に「幸福をもたらす」相談員。クイン氏は事件が起きたときだけ、どこからともなく現われて去っていく非現実世界の住人。二人は容貌こそポワロに似ていない(当たり前か)が、どちらもポワロの極端さを分け与えられた探偵役だと思える。

本書は、クリステイヤーの短編集としては十冊目になる。比較的長めの短編、もしくは短めの長編がおさめられた。オーソドックスな謎解きものばかりで、あえて野暮な解説は無用だろう。

一編についてのみ述べておけば、「砂にかかれた三角形」は、地中海のリゾート地を舞台にしている。事件はおなじみの毒殺だが、そこにいたるまでのプロセスが面白い。恋のサヤ当ての三角関係をポワロがどんなふうに観察しているかが主眼となる。脳細胞による推理というより、人間性観察による謎解きなのだ。これがパーカー・ペインのものなら、恋愛の当事者の一人が依頼人として現われ、探偵は彼女を「幸福にする」シナリオを考えだしてやるころだ。クリステイヤー短編に親しむ読者は、ここから裏表のストーリーを楽しむことができるだろう。同じ話でも、どついう観点から描くかで著しく違ってくる。それを究極めるのもミステリーのひそかな楽しみだ。

さて、最後の余興に、すでに年季の入ったクリステイヤー・ファンにも、この一冊ではまる方にも、クイズをいくつか。

まず初級。クリステイヤー映画といえば、豪華キャストによる大作が楽しい。『オリエン特急殺人事件』『地中海殺人事件』『ナイル殺人事件』『クリスタル殺人事件』。このうち二作に出演している女優はどなたか。一人はミス・マーブル役を演じたアンジエラ・ランズベリー。もう一人は？。これは、わかるだろうな。

中級。毒殺の女王といわれるクリステイヤー。作中で披露される「毒薬学」も相当なレベルにある。ポワロものの毒殺事件で、花をキーワードにした作品と、庭をキーワードにした作品は何か。

上級。本書の「死人の鏡」には、サターズウエイトという人物が登場する。この人は『謎のクイン氏』に出てくるワトソン役サターズウエイトと同人物なのか。？

答え。初級——シエーン・バーキン

中級——「黄色いアイリス」と「あなたの庭はどんな庭？」

上級——出題者にもわかりません。研究家には諸説があるようだ。